

匹見町埋蔵文化財調査報告第20集

匹見町遺跡詳細分布調査報告書Ⅹ

平成9年3月

島根県匹見町教育委員会

匹見町埋蔵文化財調査報告第20集

匹見町遺跡詳細分布調査報告書Ⅹ

平成9年3月

島根県匹見町教育委員会

序 文

本報告書は、本町の三葛地区における土地改良総合整備事業に伴って、それに先立ち実施した埋蔵文化財にかかる詳細分布調査調査書であります。

本地は、中国背梁山地を背にした広島・山口との2県に接した山間地区で、また大字紙祖のうち1字に過ぎない小集落であります。しかし、古くから栄えたらしく地内には中世を中心とした遺跡も数箇所あり、石見神楽の祖型といわれている県指定の三葛神楽や風流系の団七踊り、また柄餅の食習を遺しているなど、民俗的にも貴重な地区であるといえるでしょう。

今回の4地点の調査で、本報告のとおり、いずれの地点においても縄文時代の文化包含層が確認されております。とくに「殿屋敷地点」においては上層部において中世期も検出されており、当町にとって不鮮明である該当期における歴史の一端が垣間見られるのではないかと期待されます。いずれにしても該地区はもちろんのこと、匹見町にとってもそうした歴史文化が解明されて、将来への遺産として残していくことは、我われに課せられた努めでもありますので、ご理解下さいますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、ご協力いただいた土地所有者の方がた、指導者の山口大学の中村友博教授、また地区的皆さんや施行工事関係者の方がたにお礼を申し上げ、発刊の序といたします。

平成9年2月28日

匹見町教育委員会

教育長 斎藤惟人

例　　言

- 本書は、平成8年度国庫補助事業として、匹見町教育委員会が行った町内遺跡詳細分布調査の報告書である。

- 調査は、島根県教育委員会文化財課の指導を得て、次のような体制で実施した。

調査指導	島根県教育委員会文化財課	
	島根大学法文学部教授	田中 義昭
	山口大学人文学部教授	中村 友博
	広島大学文学部助教授	河瀬 正利
	広島県立美術館主任学芸員	村上 勇
事務局	匹見町教育委員会教育長	斎藤 惟人
	匹見町教育委員会次長	渡辺 隆
	匹見町教育委員会社会教育主事	河野 敏幸
	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡辺友千代
調査補助員	栗田 美文 大賀 幸恵 大谷 真弓	
調査参加者	栗田 定 森脇 雅夫 渡辺 照 渡辺 勉	
	斎藤 直行 長谷川時子 溝田 久子 山崎リマヨ	
	阿部 嘉彦	

3. 発掘調査に際しては、土地所有者をはじめとして、地元の方々に終始多大な協力をいただくとともに、また圃場整備事業担当者にもご協力いただいた。ここに感謝の意を表したい。

4. 本書に掲載した配置図は縮尺1/1000のもので、匹見土地改良区のご協力を得、また調査地点図は縮尺1/25000を使用したものである。なお標高測量はワールド航測コンサルタント株式会社の協力を得て行った。

5. 調査地点名は全て小字名をもって称することとし、また遺物・遺構の検出にかかわらず、そして「遺跡」という文語は用いずに、全て「地点」という文語を末尾に附して称することにした。

6. 編集にあたっては、大賀幸恵・大谷真弓氏らのご協力を得て、執筆は渡辺隆・栗田美文・渡辺友千代が担当し、編集は渡辺友千代がこれを行ったものである。

目 次

第1部 発掘調査の経緯と経過	(渡辺 隆)	1
第2部 地域概観	(渡辺友千代)	2
第1章 位置と立地	2	
第2章 歴史と生活環境	2	
第3部 各地点の発掘調査概要	8	
第1章 門田地點	(渡辺友千代)	8
第1節 地形的立地	8	
第2節 調査の概要	8	
第3節 出土遺物	13	
第2章 清左衛門田地點	(栗田美文)	14
第1節 地形的立地	14	
第2節 調査の概要	14	
第3節 出土遺物	18	
第3章 殿屋敷地點	(渡辺友千代)	19
第1節 地形的立地と歴史背景	19	
第2節 調査の概要	21	
第3節 出土遺物	26	
第4章 中ノ原地點	(渡辺友千代)	27
第1節 地形的立地	27	
第2節 調査の概要	27	
第3節 出土遺物	30	

挿図目次

第1図 調査地点位置図	1
第2図 調査地点（赤色）と遺跡関係分布図（青色）	3~4
第3図 三葛地区図	6
第4図 門田地点配置図	9
第5図 門田地点土層図	10
第6図 門田地点遺構図	12
第7図 出土遺物実測図（1）	13
第8図 清左衛門田地点配置図	15
第9図 清左衛門田地点土層図	16
第10図 出土遺物実測図（2）	18
第11図 殿屋敷地点配置図	20
第12図 殿屋敷地点土層図	21
第13図 殿屋敷地点遺構図	23
第14図 出土遺物実測図（3）	25
第15図 中ノ原地点配置図	28
第16図 中ノ原地点土層図	29
第17図 出土遺物実測図（4）	30

図版目次

図版01 南西から俯瞰した三葛地区	
図版02 1. 南東からみた門田地点の近景	2. A区の完掘状況（東から）
図版03 1. C区の完掘状況（北から）	2. 門田地点の出土遺物
図版04 1. 南西からみた清左衛門田地点の近景	2. A区の完掘状況（南から）
図版05 1. B区の完掘状況（南から）	2. 清左衛門田地点の出土遺物
図版06 1. 北東からみた殿屋敷地点の遠景	2. A区の完掘状況（南から）
図版07 1. B区の完掘状況（西から）	2. D区の完掘状況（西から）
図版08 1. E区の4層上位面の遺構表出状況	2. G区の4層上位面の遺構表出状況
図版09 1. 殿屋敷地点の縄文出土遺物	2. 殿屋敷地点の中世出土遺物
図版10 1. 南東からみた中ノ原地点の遠景	2. 完掘状況と北東壁
図版11 1. 完掘状況（北西から）	2. 中ノ原地点の出土遺物

第1部 発掘調査の経緯と経過

本調査は平成6年度において、三葛地区における土地改良総合整備事業計画が、匹見町土木課から提出されたことによって発生した。

このことに対応をせられた匹見町教育委員会では、平成7年度前半期において、同地区的周知の遺跡周辺を中心に、山口大学人文学部の中村友博教授、同土木課、同教育委員会の三者で踏査することから開始することにした。その時点で、周知遺跡に事業計画にかかるものもあり、また立地的に遺跡の可能性が想定される地点も浮彫りになったので、そこでまず5地点を分布（試掘）調査の対象地と決定したのである。そして同年12月12日には、平成8年度における文化財関係補助事業計画書を県を通じて文化庁に提出した。

明けて平成8年3月には、町土木課から三葛地区の土地改良総合整備事業は、3工区に別けて向う3年計画である旨を受ける。同年にかかることになっている1工区においては、周知の遺跡が存在していないこと、また立地的にその可能性が薄い（平成7年度の踏査においても対象としていない）ことから事業の実施を許可とした。2・3工区

においては、調査対象地点として5地点が平成7年度において選定されていたので、年次計画に従って、つまり2工区の3地点を同年の秋冬にかけて実施し、また3工区において選定した残りの2地点については、平成9年度に実施することにした。そして平成8年8月15日には、県を通じて国庫補助金の交付が決定した通知を得たので、分布調査における5地点のうち、1地点が殿屋敷と呼称されている周知の遺跡であるため、匹教第251号において平成8年9月24日付で、文化庁宛に発掘調査の通知を提出したのである。

現地における3地点の分布調査は、同年の10月16日から手掛けた11月15日まで費して実施したが、その後、緊急を要する新たな地点が1地点持ち上がったため、追加分として12月11日から同月19日の5日間を要して実施した。したがって、今回の分布調査では4地点ということになり、合せて調査面積は65m²で、82.5人役を要して行った。そして同年11月28～29日の両日は、今後の対応なども含めて指導を仰ぐため、山口大学人文学部の中村友博教授、さらに29～30日の両日は島根大学汽水城研究センターの竹広文明助手を招請し、出土した遺物などの見解について教示を得たのである。



第1図 調査地点位置図

（渡辺 隆）

第2部 地域概観

第1章 位置と立地

本報告する該当地は、島根県美濃郡匹見町大字紙祖のうちの三葛（みかずら）と呼称されている地区である（第2図・図版1）。

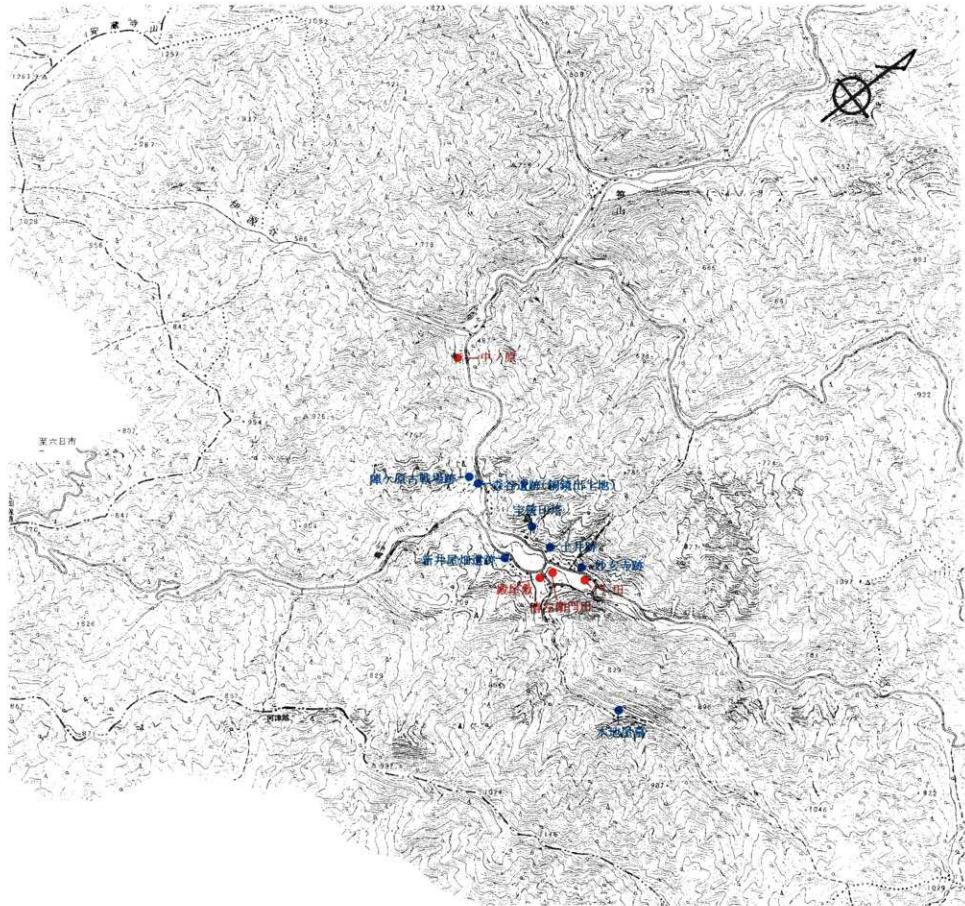
その地区は、町域の南側に位置し、南東—南西方向を1000m内外の中国背梁山地が屏風のように立ち張っていて、その背梁部は広島・山口との2県に接している。また、土地改良事業が進められる谷平地をなす可耕地は、凡そ520～530mを測り、つまり当地区は標高520～1000mを測る高地の山間地に立地しているのである。一方、地区を貫流する紙祖川は、源流を北東約5kmの背梁をなした広高山塊辺りにあって南西流し、本地区で積木川や三葛川などの河谷を集め狭小な谷平地をつくって、そして北東に転じて下流の匹見中央部で匹見川へと合流している。

こうした山間立地のため、年間平均気温は11℃と冷温で、降水量も2300mmと多雨、そして冬期は多雪でもあり、温帯～冷温帶気候を呈している。したがって流域地帯にはカシを主体とした僅かな照葉樹林もみられるが、全般的な林相はナラ類を主体とした落葉広葉樹林で占められ、また高位の山岳にはブナ林もみられるのである。こうしたトチの実、あるいはドングリなどの堅果類をつける豊富な植生は、一方で豊かな哺乳類の動物たちを育んだのである。たとえばクマ・サル・ウサギ・テン・タヌキ・キツネ・アナグマ・イノシシ・イタチ・ムササビなどを生息させ、冷水の河川ではヤマメ・ゴギ・アマゴ（アマゴは近年、山陽側から導入されたもの）などのサケ・マス属の魚類も育てたのである。

第2章 歴史と生活環境

三葛は、江戸時代から明治7年までは匹見組16ヶ村のうちの1村をなしていた地区で、上流側から牛尾原・中河内・小郷崎（小河崎）・大郷崎（大河崎）・笠山・堅下の6つの組から形成されていた。明暦2年（1656）の石高は141石余りで、また『天保郷帳』には156石余りとなっていて、戸数31軒が記録されている。産物はソバ・コウゾなどが盛んであったらしく『石見八重葎』には「農事、本地をひき、紙をすき、炭を焼く」とあり、『石見私記』には、これに栗の文字が付け加えられている。また村名については、篠蔓におおわれていたため、最初にその篠蔓をまず3本伐って開発が始められたことによる、ともいわれている。ただし前掲の『石見八重葎』『石見私記』には、三ヶ面（みかずら）とあって、「抑三葛村と申ハ防州三境之所にて三ヶ表にて成べし哉、後人誤りて三葛と書来れり」とあり、3国との接境に由来することが記述されている。いずれにしても、そうした同誌などの状況からは該当地区が未踏の避地であったような様子を窺い知ることができる。

しかし、そうした境界に立地した地域性は、とくに接境が緊迫した中世末の戦国時代において



第2図 調査地点（赤色）と遺跡関係分布図（青色）

ては、重要視された要所でもあったのである。例えば「三葛の備え」という諺が伝承されているように、時の領有権者（益田氏あるいは三隅氏）たちは狭小地区でありながら、つぎからつぎへと有力武者をおくり込んで防備していたらしいことが窺われる所以である。

例えば牛尾城というのがあるのであって、そこには斎藤權頭が挺り、あるいは原頭城には大谷彈正なる者が挺城したというなどの伝承の城を出ないが、口伝されているのである。ただ牛尾原には「ドイ」（第2図）という地名があって、その背後の山裾には、該当期の面影を遺す斎藤氏の墓石が数基みられる事から、前者の伝承地はその指呼範囲域に存在している可能性が高いといえるだろう。また後の大谷氏については、今回の調査対象地（第2図）でもあるが、殿屋敷地点には3基の宝鏡印塔などの石造物が存在しているとともに、大谷平内なる者が居住していたという史実から、前述の大谷彈正なる者の同族、もしくはその末裔などの繋がりがあるものと考えられ、実在した可能性が強いのである。前述した「三葛の備え」といわれているのは、そうした根柢的な史実性に基づいて語り継がれてきたものが、伝承的諺として遺ってきたものと考えられ、狭小地にかかわらず、益田氏などの有力支配者の介入の意図がそこに現れているといえるであろう。そうした思惑的緊張は、既に室町初期ごろからあたらしく、実際に文安3年（1448）には、吉見氏支配下の古賀領の河野・上領両氏か背梁を越えて当地に侵入してきているのである（陣ヶ原古戦場として周知の遺跡となっている）。そして、下流域の乙作原に挺城する小松尾城主の大谷則家は、宝徳3年（1451）には、逆に古賀領に越境して向氏を滅亡させているといった、そこにはそうした境界的地域性の実史がみえてくるのである。しかし、当該地区に刻まれた歴史跡は中世期のみならず、古代から培わされていったのである。例えば森谷（小郷崎）遺跡では平安時代の蓬来山文鏡が出上（寺尾文雄氏所蔵）し、また新井尾畠遺跡では同期のものと考えられる須恵器片が発見されていることから判るのである（第2図）。

江戸時代になると、匹見組は浜田藩に編入され、その直接支配は下代官に委ねられた。そして下代官として初代に任せられたのが、前述した殿屋敷の大谷平内の四男である勝兵衛であったのである。そして村制として三葛村には庄屋が置かれ、初期においては牛尾原の斎藤氏がその任に当っていたようである。

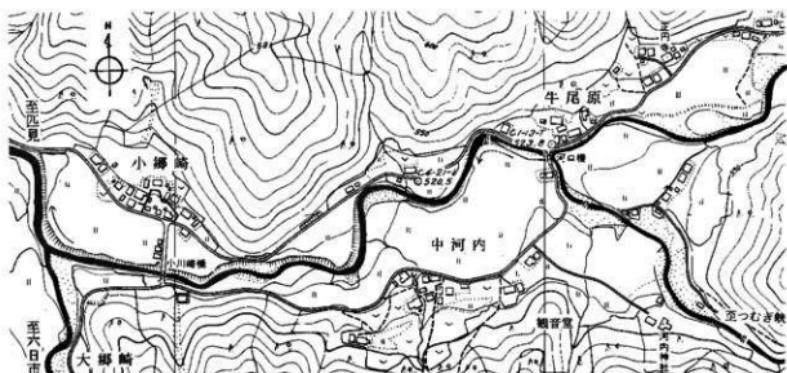
このように山間地である当地区は、一方でそうした立地性と深く関わりをもった生業が営まれてきたのである。例えば、山裾の斜面には焼畑農耕が行われ、それと相並んで、そこにはミツマタやコウゾが植生されて、とくに製紙業は全戸におよぶといった状況で盛んであった。そして該当地は、良材を求めて移動を繰返していた木地師の漂泊地でもあり、とくに積木谷や三坂谷、加冷谷などは顯著であったのである。「木地師登録兼奉賀帳」によると、該当時代には



森谷から出土した銅鏡

当地区に通算して120人余りの木地師たちが居たことがわかっており、その逗留していた場所には今日でも多くの墓石が残存しているのである（第2図）。

また該当地区的信仰においては、河内神が優越していて中河内・笛山・堅田にみられたが、明治期の神社整理が行われる以前には、他に小郷崎（小河崎）や大郷崎（大河崎）にも組神として祀られていたらしいことが「石見国神社私記」にある。この河内神は、中河内という地名と複合しているように、その河内というのは河が周流して緩やかな沖積地を形成している場所をいい、そこにまず祀られた神が「河内神」であったのである。そうした「河内」と名付く場所は、立地的にも可耕地であり、水田地などとして最初に拓かれたものであった。したがって



第3図 三葛地区図

「河内さん」という神は、いずれも水田地が広がっている上方にあって、しかもその立地は水田にとって大事な水源地という場所に祀られることが多くみられる。そのことから河内信仰は、つまり水神（水源）的色彩の濃い神と思われる一方で、最初に上地を拓いた祖先的、あるいは荒神的をそなえた神でもあってかも知れないと考えられるのである。その他「石見国神社私記」には牛尾原の山神荒神・荒神稻生地主・若宮荒神地主、中河内の八王子・地主神、小郷崎の大元河内・河内稻荷、また大郷崎の今宮山・山神荒神地主などの組神や森神が記されていて、そこには地縁的な信仰形態がみられるのである。それは例えば、牛尾原を中心の大谷一族の組神として地主があり、そしてその氏寺は妙玄寺（大谷姓）であった。中河内においては渡辺を中心にして八王子があり、その氏寺は經（京）野寺であったのである。また斎藤氏については大・小郷崎を中心に河内神がそうであり、氏寺は正円寺（斎藤姓）であったことが考えられる。しかしこれは今日的な住み別けからみる見解であって、中世期においては牛尾原に斎藤氏、中河内に大谷氏、そして大・小郷崎には寺戸氏が拠居していたのではないかと考えられる。ただ渡辺氏や寺戸氏においては経野寺の姓称がはっきりすれば、自ずから判明するものと思われるが、現段階では定かでない。

現在、三葛地区には戸数46軒、人口113人（篠山・堅田の字区も含めて）が主に農林業を中心として生活している（平成8年）。中には工場や土木建設業に従事して活計されている人たちもいるが、大半は、高齢者で農業に携わることを余儀なくされているのが現状である。その農業は水田耕作が主としているが、そのほか椎茸や山葵（わさび）栽培が中心である。とくに山葵栽培は立地的からも盛んであって、高い収入を得るものとして、旧くから生業として行われてきた（江戸時代から）。また林業としては、木材伐採業や製炭業が盛んであったが、昭和30年代をピークに、燃料革命あるいは産業構造の変革によって衰退し、過疎化が深刻となった。

地区には浄土真宗本願寺派の正円寺の1寺があり、盆行事として風流系の志賀団七踊りは一興ある民俗芸能である。また地区神としては篠山・堅田に天満宮、三葛には河内神社があり、同社には伝承されている神樂は県指定の無形民俗文化財である。そしてこうした行事には食習として柿の実を使った柿餅がつくられるなど、旧習を遺していく民俗学的にも貴重な地区であるといえる。なお唯一の公共機関として小学校が存在しているが、児童数の減少によって、その存続も現在危ぶまれているなど深刻な問題もある。

（渡辺友千代）

第3部 各地点の発掘調査概要

第1章 門 田 地 点

第1節 地形的立地

「門田（かどた）」と呼称する調査地点は、匹見町大字紙祖ロ-249-1番地に所在していて、それは三葛上区のうちの東側、つまり上流部にあたる。

該当地域は、100m南側を比高差約6mを測る紙祖川が内流し、その紙祖川の流下に沿って僅な河岸段丘が形成され、そこは水田として拓かれている。一方北側は、700~800m台の山地が紙祖川と同様に東~西方向に連なっており、その山裾には10数軒の民家が点在している(第2・3図・図版02-1)。

調査対象とした水田は、その河岸段丘の北側の山寄りにあって、山裾には北東~南西方向に町道二葛線が走り、背後には淨上真宗本願寺派の正円寺がある。地点の門山という呼称は、この寺院の門先に当っている水田であることから、おそらく名付けられたものであろうと思われる。

第2節 調査の概要

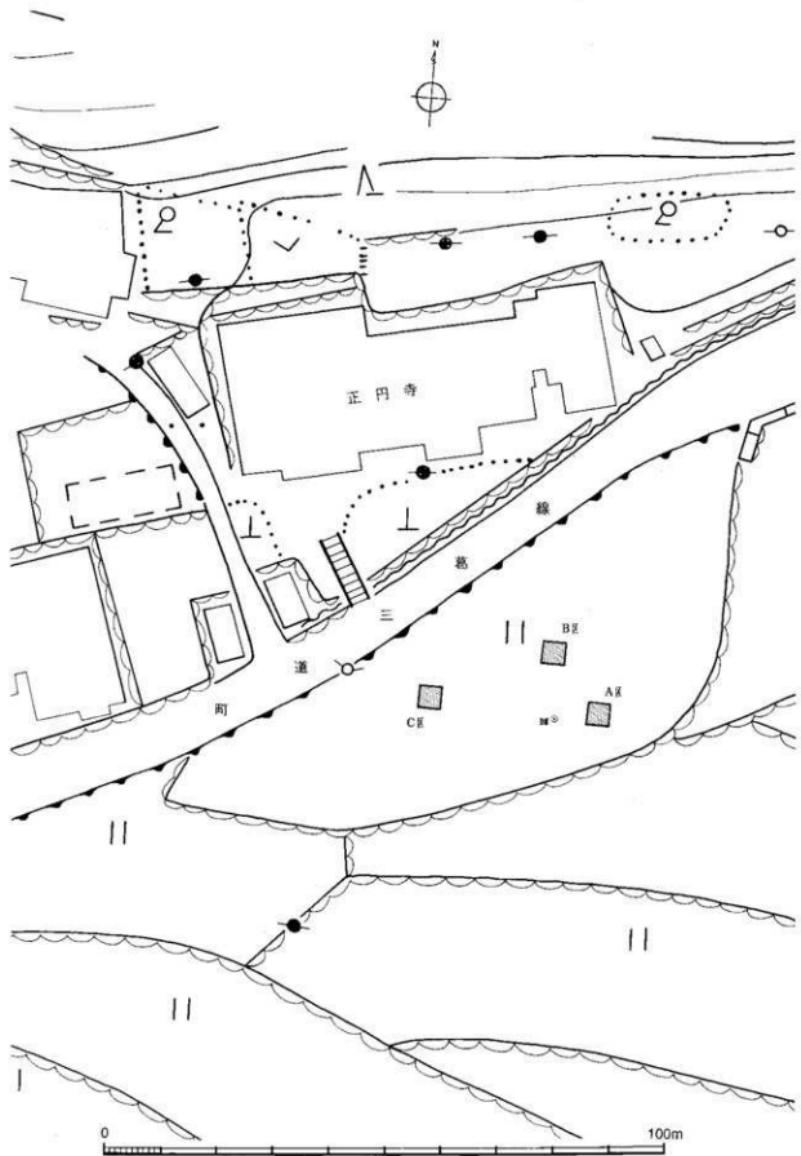
1. 調査区の設定

調査区は、現地表面標高約536.43mを測る水田の南側に、任意に設定することから始めた。その1箇所めの2mの方形区のものをA区とし、そのつぎの調査区は、A区から西側に3mを測つて、さらにその地点から山裾寄りである磁北側に5mを測って設定した。この2mの方形区のものをB区と呼称することにしたのである。そして3つめのC区と呼称するものは、A区から下流の西側に13m測った地点に同様の2mの方形区を設けたのである。したがって調査区は、上流の東側からアルファベット順に従つてA~Cまでの3区とし、その平面調査面積は12m²としたのである(第4図)。

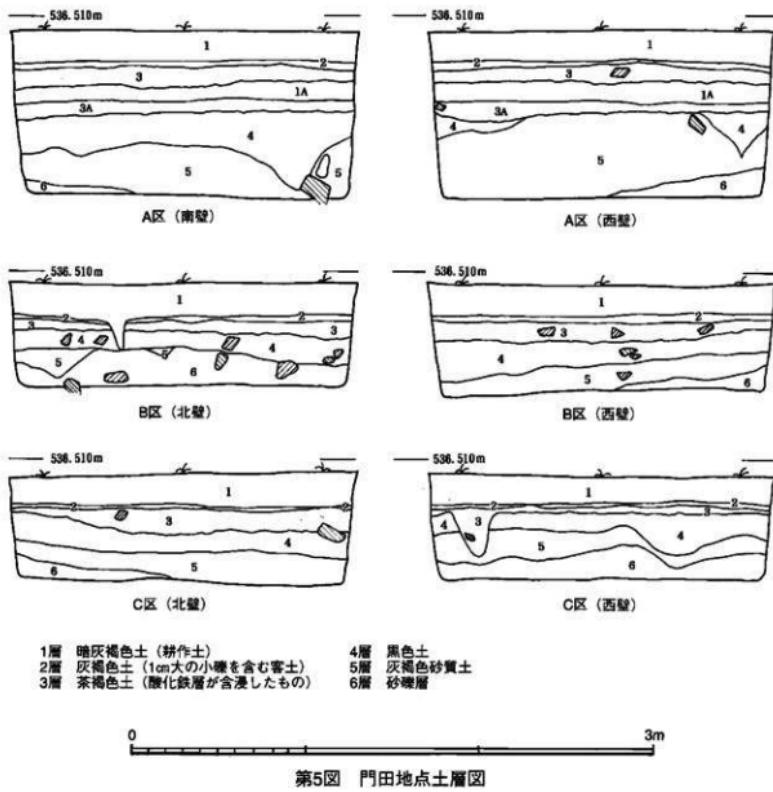
2. 基本的層序と層位

本地点の基本的層序は、1層の水田耕作土、2層の小砾を含んだ客土、3層の酸化鉄層が含浸した茶褐色土、4層の黒色土、5層の灰褐色土、6層の砂礫層の順である。各調査区の堆積状況や層位について、以下具体的にみていくこととする。

A区 A区の現地表面標高は536.42mであった。また層序は、上位から1層の水田耕作土、2層の客土、3層の酸化鉄層の順で堆積していたが、その層下(4番め)は粘質性の強い黒褐色土で、それは1層の水田耕作土と同質のものが8~12cm測って堆積していたのである。また、その下位の5番めにあたる層も酸化鉄層となっていて、つまり上位層1・3層と捉えられるものが重複していたのである(1A・3Aとしたもの)。これらの人為的と想定できるものが4番めにあり、そしてその成因によつて醸成されたと考えられる5番めの層などの層が搬入して堆積されていることは、少なくとも4番めの層(3A層としたもの)までは、人為が加えられたことを意味して



第4図 門田地点配置図



いると思われる。つまり4番めの層（3A層）を含めた上位層は、水田の再整備や造成などに成因した層位とみることができるであろう（第5図・図版02-2）。なお本層までの層序には数10点の近世期の陶器片が出土した。

4層は、有機質性の黒色土である。この黒色土は、層厚部で25cm、また薄層では尖滅するといった、厚薄差がはげしい層位であった。土質はやや砂質性で若干、礫が混入された。本層では土器1点、石器剥片が3点出土している。また下位面には、5層に陥入した遺構らしく陥込みがみられた（第6図・図版02-2）。

5層は、灰褐色土である。層厚は15～35cmを測り、全体的厚層ではあるが、比較的厚薄差がみられる。土質は、やや砂性である。僅かな酸化鉄の含浸でも掘削しにくい層位であった。なお、本層には遺物・遺構とも検出されなかった。

6層は、河床礫である砂疊層で、基盤層と想定されるもの。遺物・遺構は皆無で、以下は同様な状況とみられたので、表面から約1.1mを掘削したところで止めた。

B区 B区と呼称する調査区は、対象水田地のほぼ中央部に位置する地点に設けた（第4図）もので、現地表面標高は約536.45mであった。層序は、上位から1層の水耕作土、2層の客土、3層の酸化鉄層、4層の黒色土、5層の灰褐色土、6層の砂礫層の順で堆積する。本層ではA区でみられたように、1層と3層が重複した層序はみられなかった。

そのうち1層は、20~22cmを測る層厚で、比較的厚かった。また2層の客土と想定される灰褐色土は、1~4cmを測る層厚で、ほぼ水平に堆積する。この両層からは近世期のものと想定される数10点の陶磁器類が出土している。

3層は、酸化鉄分が含浸した茶褐色土である。層厚は7~13cmを測って、酸化鉄分の含浸にしては比較的厚いように思われた。そのため密着度が非常に強く砂質性にもかかわらず、掘削はきわめて困難であった。なお本層からは遺物・遺構とも検出されなかった。

4層は、層厚15~23cmを測る円礫を含んだ黒色土で、凡そ上流にあたる東側が薄く、下流の西側が厚かった。なお遺物は下位を中心にして、1点の土器片と2点の石器剥片である縄文期のものが出土している。また5層との層界には遺構らしき陥込みも検出されているが、本層に伴った15cm前後を測る円礫は、大きさあるいは意図的な配置などがみられなかつことから、自然の搬入石であろうと思われた（第6図）。

5層は、砂質性の灰褐色土である。上流の東側は尖滅あるいは消去部分があつて不確かであるが、西側は凡そ10~25cmを測って安定していた。しかし低位となっている紙祖川へ斜度をもつとともに、厚さを増していくように捉えられた。土質は砂質性で、15~20cm大の円礫を含み、これらから河道であった様子が窺われた。なお、遺物・遺構と想定されるものは検出されていない。その下位の6層は、河床礫が充填する円礫層であった。

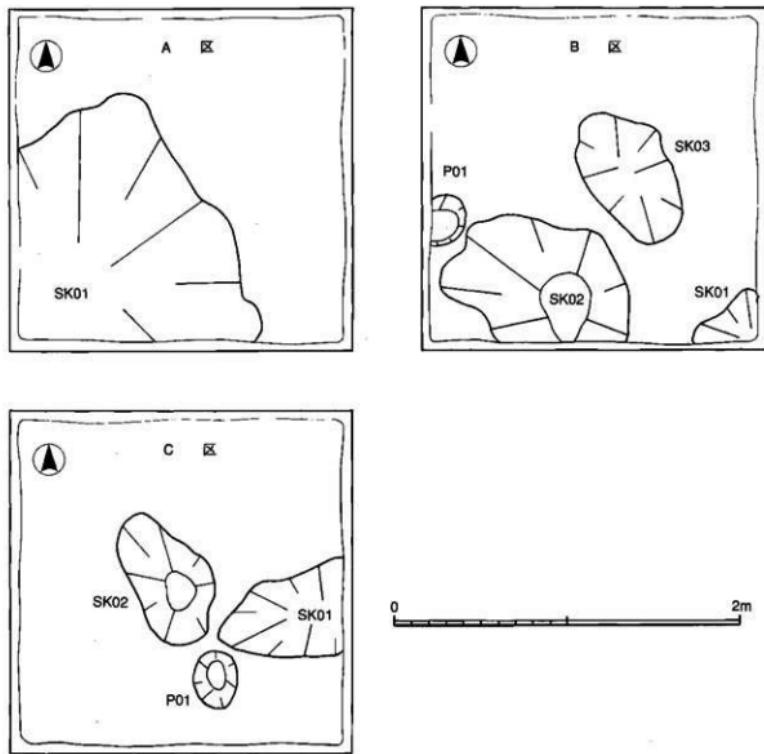
C区 本調査区の現地表面標高は、536.43mを測る。上位から1層耕作土、2層の客土、3層の酸化鉄分が含浸した茶褐色土とつづく。このうち1・2層からは近世期の陶磁器類が数点出土しており、また1点の石器剥片が混入していた。4層は、A・B区と同様、黒色土である。層厚は10~20cmを測り、他のA・B区に比べて円礫は少なく、また上・下位の層界も暖急であるという違いがあった。しかし土質においては差なく、一連性のものと捉えられる。なお本層からは、縄文期の土器片・石器剥片が1点ずつ出土しており、また5層との層界には上坑らしき陥込みもみられた（第6図）。

5層は、層厚5~17cmを測る砂質性の灰褐色土。上位の4層と同様、下流方向の西側に向ってやや上昇し、逆に東側はレベルは低くなつて厚層となっていた。礫はA・B区に比べて少なかつたが、砂性は強い。なお、本層に伴うと想定できる遺物、あるいは遺構は確認できなかつた。

6層は、基盤層としての砂礫層で、これ以下は考古学上、不意味と思われたので掘削は止めた。

3. 検出遺構

A・B・Cのいずれの調査区とも遺物・遺構が検出された。ただし1・2層の人为層ともいべき層位からは近世期と想定されるものであつて、遺構は伴わなかつた。しかし4層の黒色土には数点であるが、遺物が出土しており、その下位の5層との層界には顯著な陥込みがみられ、狭掘といふこともあって、その機能的性格は判ないが、該当期の遺構と想定できるものであった（第6図）。



第6図 門田地点遺構図

このうちA区のものであるが、南西隅に北東半部が顕出した（図版02-2）。本坑には黒色土が陥入していて、坑上の現出面と最坑底の差は28cmを測るが、坑壁の斜度は緩やかであった。また3点の遺物は、土器1点、石器剥片2点で、そのうち1点の石器剥片は土坑上に検出されている（第7図-4）。またB区においては、同様に4層黒色土と5層灰褐色土の層界に、とくに南半部に偏在して検出されている（第6図）。このうちSK01としたものは南東端に半出し、その坑高は16cm。またSK02としたものは24cmを測って、坑壁の斜度は緩やかで、SK03は7cmと浅い。そしてP01としたピットは、西壁に半出したものであるが、形状的にみて、坑壁もしっかりしていることから柱穴かもしない。なお同層に検出された1点の土器片、また2点の石器剥片は、いずれも同坑に関連しているかのように、2点はSK02に、またもう1点はSK01との間に検出している（第7図-6）。

つぎのC区でも遺構と思われるものが4層と5層との層界に検出され、5層の灰褐色土に陥入していた。P01としたピットは、短径約20cm、長径約30cm、その深さは6cmと浅いが、構築層は

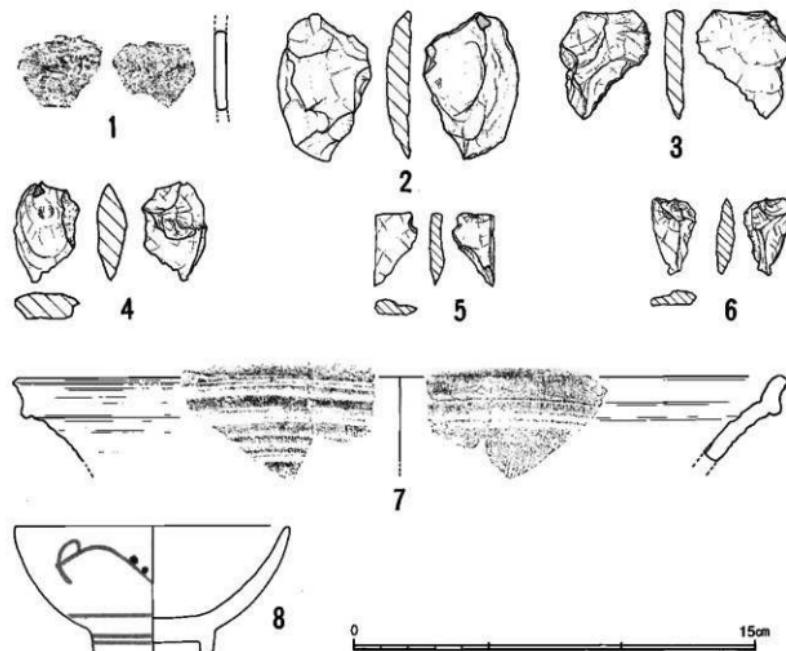
4層中から介入していたと考えられる。またSK01としたものは、東壁に長径部分が半出して検出されている。最坑高は5cmと浅く、したがって坑壁斜度はきわめて緩やかであった。またSK02も短径約40cm、長径や80cmの長楕円形で、最坑高は約13cmで深い土坑であった。いずれの遺構も4層の黒色土が陥入していて、境界も明確であった。なお、出土した2点の石器剥片は、うち1点はSK02から検出されたものであった（第7図-5）。

本地点の遺構全体についていえることであるが、これらの陥込みが人為的であることは、坑壁などがしっかりしていること、僅少ではあるものの遺物との共伴性が強いことから考えて、遺構と捉えられる。しかし、狭掘ということなどもあって、その機能的な性格については把握しきれなかった。

第3節 出土遺物

1. はじめに

本地点からは、土器片3点・石器の剥片7点・陶磁器類54点・鉄器類1点が出土している。これらのうち土器片は、全て4層の黒色土に検出されているが、石器剥片の7点中のうち2点は3層の酸化鉄層であった。また陶磁器の54点および1点の鉄器は、1・2層から出土したものであった。



第7図 出土遺物実測図(1)

以下、実測した遺物を中心にみていくことにする。

2. 実測遺物（第7図・図版03-2）

1はB区から出土した胴部と思われる粗製の土器片。調整は内外面ともナデで、薄手なもの。外面には煤が付着し、やや赤おびた茶褐色、また内面は淡茶褐色を呈する。胎土は精緻で、焼成も堅綴である。時期については判らないが、他の小片に縄文前期と思われるものがみられることから、同時期のものかも知れない。2は、A区に出土した凝灰岩質の石器剥片で、風化がはげしく灰色を呈する。打力は右側辺にあって、單一打裂する。2次加工や使用痕はみられない。3は、A区の4層に出土した安山岩系の削器。器長5.4cm、器幅3.5cm、器厚0.8cmを測って、重さは14gである。背面の右縁には、2次加工としての剥離調整が施されている。以下の4~6は、いずれも小片で、2次加工などの意識的な調整はみられず、石クズと思われるもの。

7~8は、陶器片。そのうち7は、口縁部である。口縁部外面は貼付けられた凹線が施され、また体部には横方向の沈線状の施文痕が顯著である。釉は褐色で、胎土は淡灰色を呈する。おそらく近世期のもので、瀬戸窯のものと思われる。8は、染付碗。体高は3.2cmで、口縁径にくらべて低い。釉は内外面とも全面に施釉され、青味おびた灰白色である。また染付の呉須は、淡青色とも青色で、その図版は蕨手文の単純化した手法を施したものと思われる。おそらく近世期の伊万里窯のものであろう。

（渡辺友千代）

第2章 清左衛門田地点

第1節 地形的立地

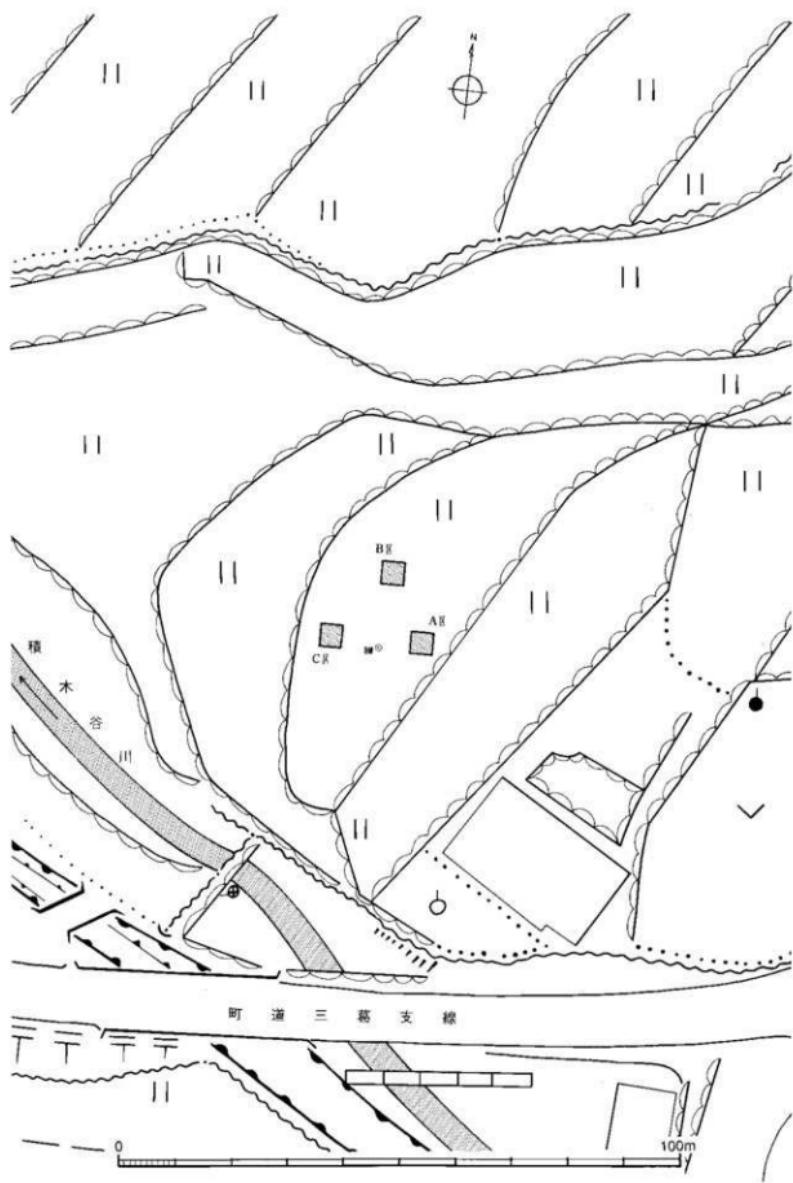
本調査地点は、小字名を清左衛門田と称する島根県美濃郡匹見町大字紙祖口309番地に所在し、そこは水田地と化している。

該当地は、120m北側を本流である紙祖川が比高差7mを測って西流して、狭長な河岸段丘を形成しており、その左岸に立地している。一方、南側30mには横木谷川が北西流し、110m地点で紙祖川に相会しているため、つまり本地点は2川に囲まれた舌状部にあたっている。また、背後にあたる西側には、本地区においては“三葛富士”(825m)と俗称されている山地がひかえ、その山裾はながらに派生していて、そこには数軒の民家が点在しているのである(第2・3図・図版04-1)。

第2節 調査の概要

1. 調査区の設定

調査対象地は、舌状を成した河岸段丘の南端にあたり、現地表面標高530.94mを測る三日月状を呈した水田に設けることにした。その調査区の設定にあたっては、対象地のほぼ中央部から南側に基点となる杭を任意に設定することから始めた。まず、その基点から西側に3m測って、そこに2m方形区を設け、これをA区としたのである。B区は、基点から紙祖川方向の磁北側に6m測つて、2m方形区を設定した。そして、C区とする2m方形区は、基点から3m東側に設けたのである。



第8図 清左衛門田地点配置図

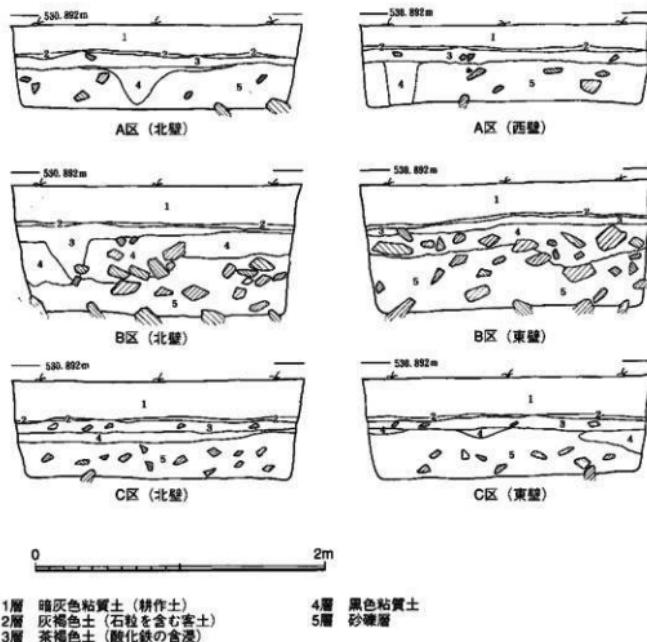
したがって調査区は、その基点を中心にトライアングル状に配列し、山裾側から左廻りにアルファベット順に従ってA～C区と呼称することにした。なお平面調査面積は、2m方形区が3箇所としたため、計12m²ということになる（第8図）。

2. 基本的層序と層位

本地点の基本的層序は、上位から1層の暗灰色粘質土（水田耕作土）、2層の灰褐色土（石粒を含む）、3層の茶褐色土（酸化鉄の含浸）、4層の黒色粘質土、5層の砂疊層（河床疊）の順に堆積した。以下、3調査区を個々にみていくこうと思う。

A区 本調査区は、調査対象地の東に設定したもので、現地表面標高約530.822mであった。その1層の水田耕作土は、層厚16～23cmを測って、谷寄りに南側に向かって薄くなっていた。

また2層は、客土と考えられる灰褐色土で、2～3cm大小の小石を多く含み、層厚は2～3cmを測って薄くなっていた。断続的な部分がみられるものの、水平に堆積する。3層は、酸化鉄分が含浸した茶褐色土である。層厚は8～12cmを測り、下流の西側に向かって厚層となっていた。なお本層までの出土遺物としては、数点の土器片・石器剥片・近世の陶磁器類であったが（第10図）、遺構は検出されていない。



第9図 清左衛門田地点土層図

4層は、黒色土で粘性をおびている。本区においては、部分的にみられるのに対して、紙祖川側のB区では層厚となっている。本来は有機土として、比較的厚く基盤層にそって堆積していたと思われるが、水田開墾時に高かった東側を削平で除去されたものと考えられる。したがって1~2層で出土したそれらの遺物は、本来は上位面に包含していた可能性が強いと思われる。

5層は、5~20cm大の角礫を多く含む砂礫層であり、下位へ約30cmばかり掘削したが、無遺層の河床礫と判断し、以下は中止した。

B区 調査対象地のほぼ中央部西側設けたB区は（第8図）、現地表面標高約530.797mを測る。層序は、上位から1層の暗灰褐色粘質土（耕作土）、2層の灰褐色土（客土）、3層の茶褐色土（酸化鉄層）、4層の黒色粘質土、5層の砂礫層（河床礫）の順で堆積する。

その1層は、24~26cmを測る水田耕作土で、他区に比べて厚層である。つぎの灰褐色土である2層の客土は、全体的に薄層であった。部分的に尖滅したところがみられ、ほぼ水平に堆積していた。3層は、酸化鉄分が含浸した茶褐色土である。層厚は2~10cmを測って厚薄差が激しく、下流の西側に対して東側が薄層であって、やはり山寄りの高位面を削平したことが看取できる。なお本層までの層序には、縄文期のものと想定される2点の石器剥片および近世期の陶磁器類4点が出土した。

4層は、層厚12~30cmを測る比較的厚く堆積した有機質性の黒色土である。山裾地形のためか、下流である西側に、厚さを増して堆積した。また本層には15cm大を測る角礫が多く含まれているが、それは意図的な配置でないことから人為的なものではなく、地形および層状からみても東側の山地からの崩壊した堆積土と考えられる。そして、その下位の5層は、5~20cmを測る円礫におおわれる河床礫であった。したがって以下は、無遺層と捉えられたので、掘削はしていない。

C区 C区と呼称する調査区は、調査対象地のA区に対向する西側端に設けた（第8図）もので、現地表面標高約530.787mである。層序は、上位から1層の暗灰色粘質土（耕作土）、2層の灰褐色土（客土）、3層の茶褐色土（酸化鉄層）、4層の黒色粘質土、5層の砂礫層（河床礫）の順に堆積する。そのうち1層は、層厚24~30cmを測る水田耕作土で、比較的厚層であった。2層は客土で灰褐色土。その層状は他区と同様に部分的に尖滅したところがみられ、層厚は2~3cm測って、ほぼ水平に堆積していた。

3層は、酸化鉄分が含浸した茶褐色土で、層厚4~8cmをはかり、3~5cm大の石粒を多く含んでいた。この層は、色調的に分層しているけれども、土質的には礫を含むものの下位の4層と類似するものと思われる。本層からは出土遺物として、上位層からの搬入と捉えられる近世期の陶磁器類6点、そして縄文土器片2点、石器剥片1点が出土しているのが、遺構らしきものは認められなかった。

粘質性である4層の黒色土は、層厚3~15cm測って、層厚差がはげしい。とくにA区寄の東側では、本層の上位層を強く削平されたと思われ、部分的に尖滅がみられた。そして、下流の西側へ向かっては、やや厚く堆積しその土質は有機質土で、80cm大の角礫を含んでいる。5層は、基盤層としての砂礫層で、これ以下は考古学上、不意味と思われたので凡そ地表から約72cm掘り下げ

たところで調査を終えた。

第3節 出土遺物

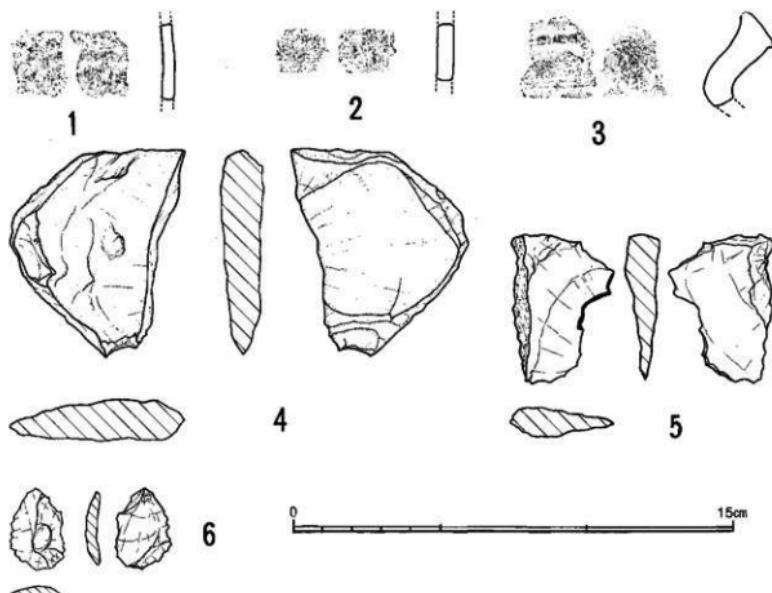
1. はじめに

本地点における遺物の包含層は、1・2層の水田耕作土および客土と、3層の茶褐色土であった。このうち1・2層の人为層では6点の近世期の陶磁器片が出土した。しかし本層には削平などによって混入したと思われる2点の縄文土器片と、2点の石器剥片が出土している。また一方、3層では陶磁器は出土しておらず、3点の石器剥片と、3点の縄文土器片が出土している。

これらのことから、1・2層は強い掘削などで搬入したものと考えられ、そして3層の堆積状況からみて、色調から層別しているものの、3層は下位層の4層と同一したものと捉えられる。よって3層としているものは4層の黒褐色土中に、酸化鉄分が含浸したもである、ということになろう。したがって縄文遺物が出土した層位は、黒色土の上位に出土したものとして捉えられるのである。

2. 実測遺物（第10図・図版10-2）

1は、A区の3層に出土した精製系の土器片。薄手で、内外面とも磨く。色調は内外面とも灰褐色を呈し、焼成はきわめて堅緻である。おそらく縄文晩期の黒色磨研土器系のものと思われる。2は、C黑色の3層に出土した縄文土器と思われる細片。色調はナデで、色調は赤褐色を呈し、



第10図 出土遺物実測図(2)

堅硬なもの。3は、C区の3層に出土した浅鉢系の口縁部。頸部は掘折し、外面の突出部に2本の沈線で区画して、その間に縄文が施されている。色調は、外面は暗褐色を呈し、また内面は灰褐色である。

4~6は、石器類。そのうち4は、B区の3層に出土した凝灰岩質のもの。全体に風化がはげしく灰色を呈する。背腹面とも大きめの打面がみられ、調整にしては粗っぽい。石核系のものとおもわれるが、ひょっとすると打製石斧の先部かも知れない。5は、B区の3層に出土した安山岩質の剥片。左辺に自然面がみられ、打点は間をおく右辺からのもので、腹面の打面も同様方向のものである。一部背面に調査時に破損（黒く塗りつぶした部分）した部分があるものの、腹面の左辺下には刃部の調整が施されている。おそらく削器とおもわれる。6は、B区の1・2層で出土した安山岩片。背面には両側辺方向からの打面がみられ、両縁は鋭っている。またその打面の中央には1本の稜線がとおり背部をつくっている。剥片か利器かは、はっきりしないが、剥片石器かも知れない。

(栗田美文)

第3章 殿屋敷地點

第1節 地形的立地と歴史背景

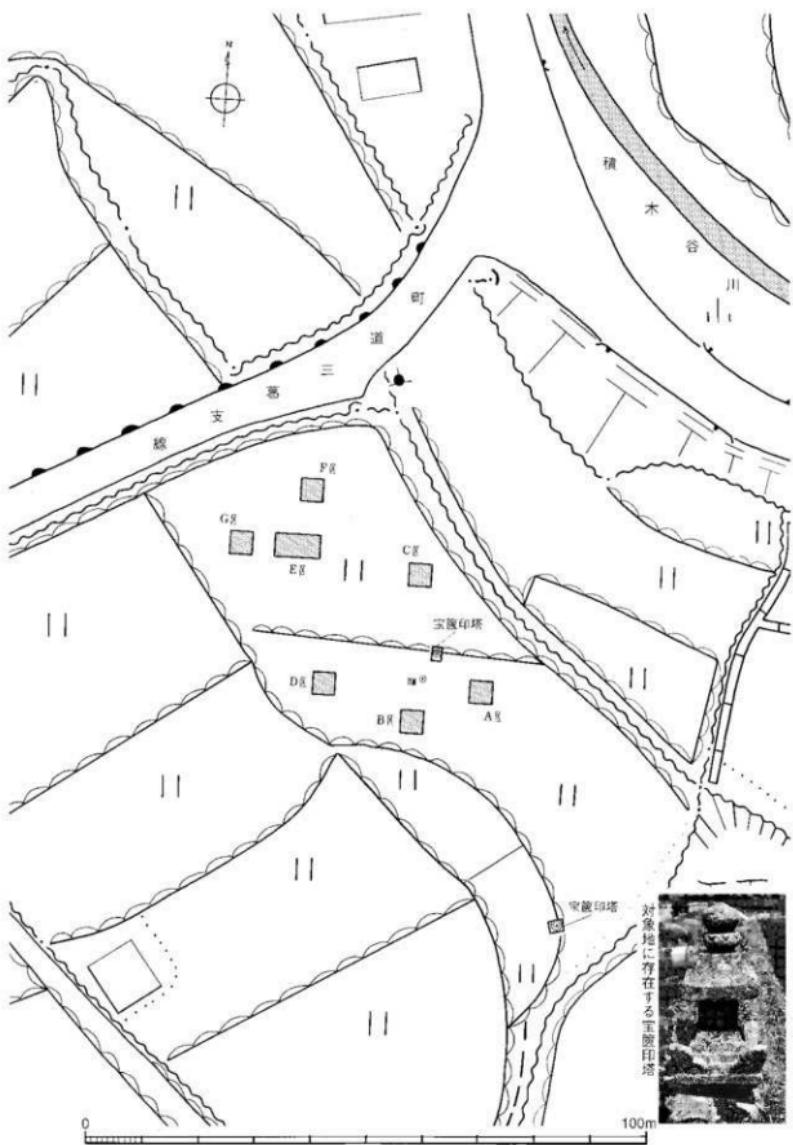
1. 地形的立地

殿屋敷（とのやしき）と呼称する地點は、四見町大字紙祖口327番地に所在する周知の遺跡である。該当地は、三葛上地区の南東側にあって、紙祖川が形成した左岸に立地している。この紙祖川が形成した河岸段丘は、大きく2段から成っており、本地点はその上段部に形成された標高530.35~531.70mを測る水田に立地している。また至近の北東側には積木谷川が比高約4mを測って北東流し、約150m地点で紙祖川と相会している。そして北面側の1.5m低い段丘面には町道三葛支線が北東~南西方向に走っていて、該当地は2方を微高状を成して形成されているのである。

一方、南東・南西側は、標高700~800m台を測る山地がひかえ、その山裾から100~150mを測る派生した段丘面は、水田と化されて本地点へとせまっているのである（第2図・図版06-1）。そして地区の氏神である河内神社は、その山裾にあり、また民家は本地点の下流方向にあたる北東側に数軒が点在する、といった景観にある。

2. 本地点の歴史背景

本地点の歴史背景については、第2章で若干ふれているように、大谷氏の住居跡といわれている場所である。この大谷氏については、どういう経緯によって居住していたものか、また出自あるいは土着時期などがはっきりしない。大谷という姓氏から恐らく、益田氏の息吹きのかかった大谷郷（現益田市大谷町）の地頭職であった、その分裔と思われる。また土着時期については、斎藤氏との領領関係も考慮した上で捉らえなければならないが、本地域を掌握していた小松尾城主大谷氏の居住時期からみて、おそらく15世紀中ごろ（文安・宝徳期）ではなかった



第11図 殿屋敷地点配置図

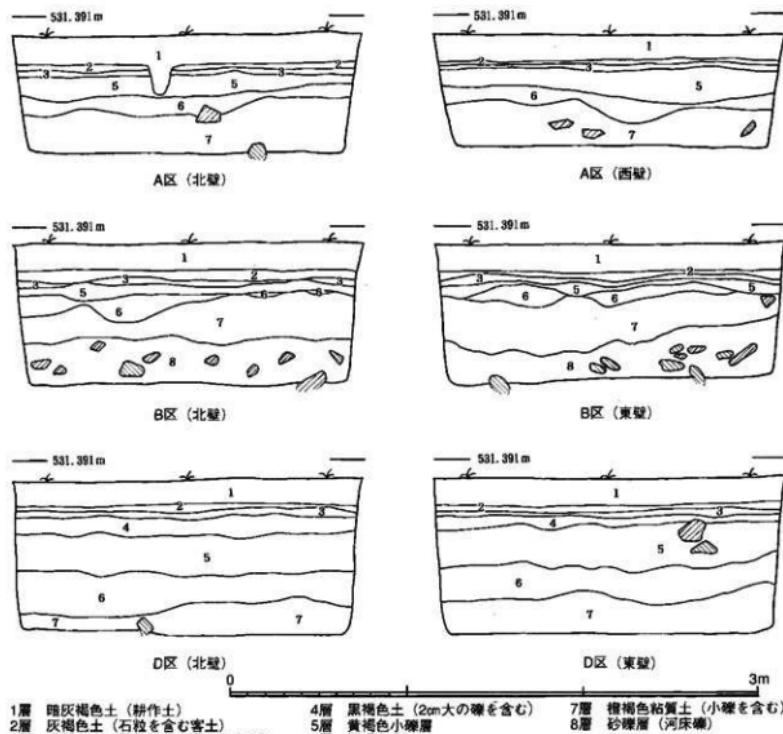
かと思われるるのである。

しかし、この大谷氏も天正3年（1575）には益田氏の命を受けた山道（現美都町仙道）郷の竹城主寺戸惣右衛門によって、時の大谷平内は逃亡を余儀なくされたのであった。そして徳川体制となった17世紀初めには、その4男勝兵衛は匹見組の下代官として任じられたようである。そうした実史性を物語るかのように、該当地には今も3基の宝篋印塔（第11図）などの石造物が点在し、往時をしのばせているのである。

第2節 調査の概要

1. 調査区の設定

調査対象地とした殿屋敷地点は、3段からなる水田である。その水田の現地標高は、高い方から531.82m, 531.61m, 531.27mとつづく。そのうち狭少であった上段の水田は、今回は調査区を設けないことにし、したがって中・下段の水田に限定することにした（第11図）。



第12図 殿屋敷地点土層図

その中段の水田は、南東側が小谷で落ち込んでいたため、水山造成時などによって人為が加えられたと想像されたので、調査区は北東寄りに任意に3つの方形区を設けることにした。そして掘削した結果、6層めに縄文文化層を確認することはできたが、中世期の史実を実証されるだけの遺物・遺構は掘削からは明らかにできなかった。したがって、下段に新たな調査区を設けて把握することにつとめたのである。それは2mの方形区を田のりに従って配置し、4箇所としたのである。その結果、E・G区とした調査区から該当期と想定される遺物・遺構の検出を確認することができたため、とくにE区においては、さらに2mの方形を西側に伸張した。

よって平面的な発掘調査区面積は32m²ということになり、またそれぞれの区名は、上流の東側からアルファベット順に従って呼称することにしたのである（第11図）。

2. 基本的層序と層位

本地点における基本的層序は、上位から1層の水田耕作土、2層の石粒をふくんだ灰褐色土（客土）、3層の茶褐色土、4層の黒褐色土、5層の黄褐色小礫層、6層の灰褐色土、7層の橙褐色粘質土（小礫を含む）8層の砂礫層（河床疊）の順で堆積する。しかし地区によっては相違する場合もあるが、以下、各調査区ごとにみていくこととする（第12図・図版06-2～07-2）。

A区 表面標高約531.27mを測るA区では、水田耕作土、客土、3層の茶褐色土とつづくが、その耕作土は16～18cmを測って水平で、比較的厚層であった。また2層の客土や、3層の酸化鉄分が含混した茶褐色土は、2～3cmを測って薄い。

なお、本区においては4層に順層するはずの黒褐色土が見当たらなかった。これは該当地が傾斜地であったために、水山造成などによって、つまり上位層にあたる該当層が削りとられたのではないかと考えられる。このことは斜地としての段差が認められるB区でもみられたことがあるが、しかしD区においてはこれを肯定するかのように、順層していることからいえるのである。

5層にあたる角礫を含んだ黄褐色土は、層厚8～20cm測って、厚薄差が激しい層であった。なお、本層に至るまでの層序では、遺物・遺構はいずれも確認することができなかつた。

6層は、灰褐色土である。層厚は3～15cm測って薄く、その層界は不鮮明であった。しかし堆積の仕方は、表皮面の原地形を表出しているかのように、つまり低位となっている北側に傾向する。なお本層には遺構らしき痕跡はみられなかつた（層位が薄かったということもあるかも知れない）が、縄文土器片2点が出土している。

層厚を約30cmを測る7層は、角礫を含んだ粘質性の橙褐色土であった。角礫には20cmを測るものもあり、層状から山地の崩壊した堆積土ではないかと判断された。遺物・遺構はなく、また下位層には、河床疊と考えられる砂礫層であった。

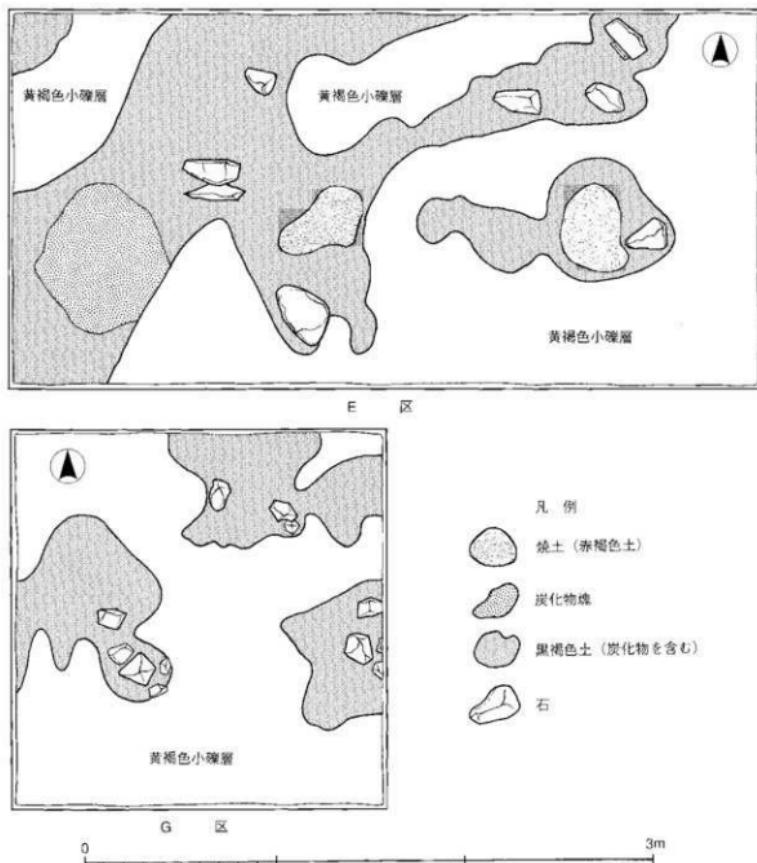
B区 本区は、中段に設けたもので、その表面標高は約531.285mを測る。層序においては、東側のA区に近いということもあってか、A区に類似する。つまり層位差は異なるものの、4層にあたる黒褐色土層が消去されているのである（削平のためと想定される）。

その1層は、層厚14～16cmを測る水田耕作土、つぎの客土としての灰褐色土の2層は、2～7cmを測って比較的厚く堆積していた。そしてその客土には玄武岩質の石核が1点ほど出土しているが、

これは強い削平などによって混入した遺物であろうと考えられる。

3層は、酸化鉄分が含浸した茶褐色土である。部分的に尖滅したところもみられるが、厚い部分では8cmを測って含浸差がはげしい層位である。遺物あるいは遺構らしきものは認められなかった。なお下位層とみられる黒褐色土は、本区では堆積していなかった。

5層は、小礫を含んだ黄褐色土である。層厚は2~10cmを測って、他の調査区（A・D区）に比べて薄層である。また次層の6層は、灰褐色土で、尖滅した部分がところどころみられるが、層厚では16cmあまりを測って不安定な堆積の仕方であった。しかし、本層からは1点の縄文土器が出土している。



第13図 殿屋敷地点遺構図

7層は、層厚10~30cmを測る橙褐色土である。やや粘質性をおび、アカツチ土に小礫を含んだ層位。遺物・遺構は確認できなかった。なお下位層の8層は、15cm大の円・角礫を含んだ砂礫層であり、下位に20cmあまり掘削しつづけたが、無遺層と思われたので、以下は止めた。

D区 順層立って概説する場合、ここでとり上げるのはそぐわないのであるが、本区はA・B区と同様、中段に設けたものであり、また掘削の深度層が同一であるので、改めてここで取り上げておくことにする。

その層序は、1層の水田耕作土、2層の客土、3層の茶褐色土とつづき、その層列はA・B区と違わない。しかし、その下位層には明確な黒褐色土の層位がみられ、既掘区のものとは異にする。層厚は4~12cmを測って、ほぼ水平である。上質的みて、有機質性の堆積土と考えられるもの。なお本層には、中世期のものとおもわれる陶磁器片・鉄器の各1点が出上しているが、遺構らしきものは検出できなかった。

5層は、4cm大の礫を含んだ黄褐色土である。層厚は20~30cmを測って、比較的水平に堆積していた。小礫は角ばっており、土質は山土系統のものと思われた。

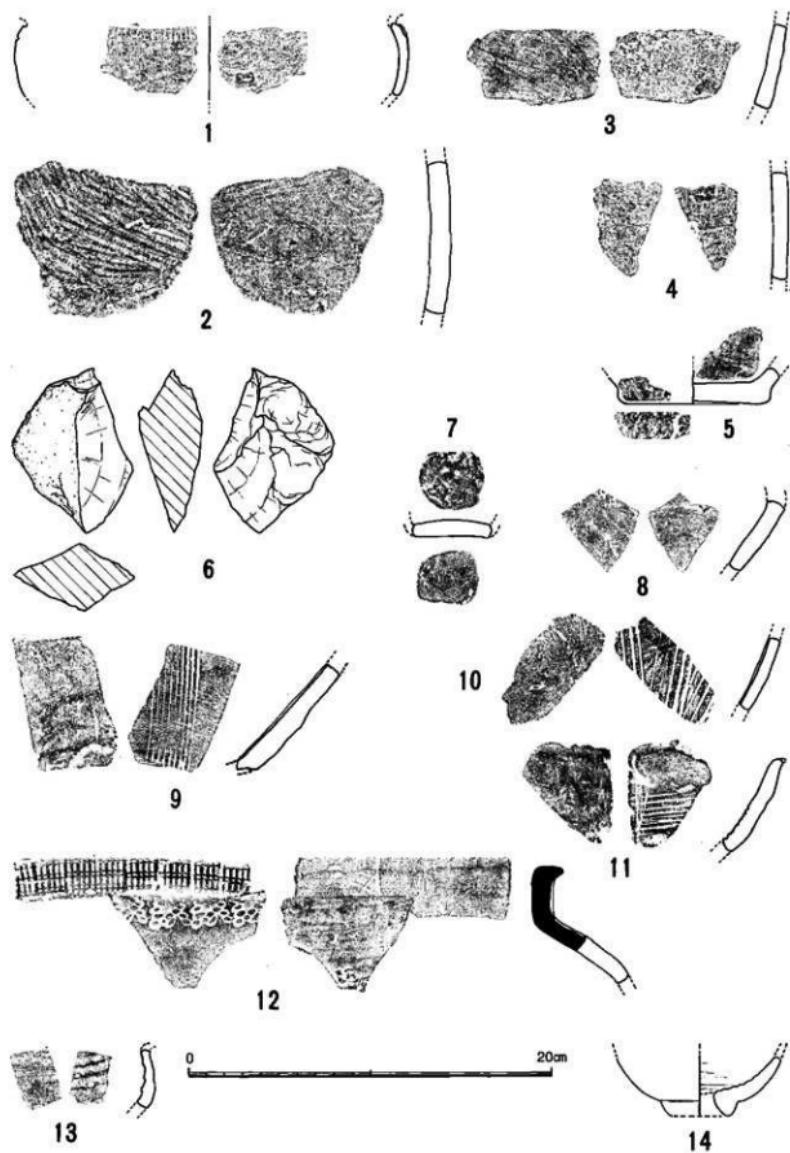
6層は、灰褐色土である。層厚は20~30cm測り、既掘区のものと比べてやや層厚で、しかも深層位置に堆積する。本層は縄文の包含層と想定されるが、本区では遺物・遺構とも該当期のものは皆無であった。

7層は、粘質性を含んでいるが、中には下位を中心に20cmばかりの円礫らしいものも散見される。したがって8層にあたる砂礫層との層界は判断しにくかった。遺物・遺構はない。

3. 他の調査区の出土遺物と遺構

中段に設けたA・B・D区以外に、表面標高約530.61mを測る下段にはC・E・F・Gと呼称する調査区を設定した。これらの調査区では、いずれも4層以上の層位において、中世期のものと想定される遺物が比較的出土しており、とくにE・G区では遺構を伴っていたのである。したがって、これらの調査区においては、それ(4層)以下を掘削せず、遺構の表出面のみを実測図化し、後日の検討課題(盛土工法や本格調査などを念頭において)に資することにした。以下、その状況を若干説明しておくことにする。

まず C区であるが、設定位置が北東端ということもあってか、調査の終止層とした3・4層は、部分的に耕作土が嵌入するなど、攪乱していた。遺構らしきものは確認できなかったが、本区からは縄文土器3点、1点の石器片と1点の陶磁器類が出上している。 E区は下段の水田のほぼ中央部に設けた調査区である。凡そ表面から25cmあまり掘削したところで、つまり4層と5層との層界に人為による陥ち込み、あるいは炭化痕・焼土痕などの遺構が表出した(第13図・図版08-1)共伴する上師質や瓦器、また陶磁器類の10数点のほとんどが中世期と想定される遺物であったことから、それらの遺構も該当期のものと判断した。このうち5層の黄褐色土に掘り込まれたと想定される黒褐色土には炭化物を含み、区内を凡そ北東一南西方向に帯状に走っていた。また炭化物の嵌入には部分によって疎密性がみられ、そしてその範囲には意識的と捉えられる割れ石(焼火のためと思われる)が点在した。また顯著であったのが焼土痕で、径35×50cmのものと、径30×50cmを測るものが2箇所に検出されている。また出土遺物には、陶磁器類片7点、瓦器片5点、



第14図 出土遺物実測図(3)

そして石器剥片2点、1点のスエ質などがあった。F区は北端部に設けたもの。本区も同様に4層まで掘削を試みたが、遺構らしきものは認められなかった。ただし中世期のものと想定できる陶磁器片6点と、3点の瓦器片が出土している。G区では3基の陥込みと想定される遺構が検出された（第13図・図版08-2）。これらにはいずれも炭化物が嵌入し、黒褐色を呈する。またE区と同様、土坑と思われる遺構には15~25cmを測る割れた石が点在し、意識的に配されたことが窺われる。これらの表出した遺構は、その様相からE区とも関連するものと判断されるとともに、出土した遺物から中世期の遺構と想定される。なお、本区から出土した遺物は、陶磁器片・土師質片・石器剥片・鉄器の各1点ずつであった。

第3節 出土遺物

1. はじめに

本地点における出土遺物は、大きく仕別して縄文と中世の遺物であったといえる。このうち縄文の遺物は、基本的には6層の灰褐色小礫層に包含するものとして捉えられ、また中世の遺物は4層の黒褐色土であったということができる。

これらをさらに種別して数量的にみると、縄文土器6点、石器などの剥片5点、そして中世期のものと想定されるものでは陶磁器16点、瓦器9点・鉄器2点・土師質1点・須恵質1点であった。ただ変則（中世遺物の些少の上段部では深層掘削、また下段部では浅掘といった）的な調査掘削であったため、この出土数量のみをもって、本地点の性格なりをいうことはできないことはいうまでもないことがある。

2. 実測遺物（第14図・図版09-1~2）

1~6は、縄文後晩期のもので、そのうち1は、C区の攪乱した上位層に出土した口縁部片。口唇部は欠けるが、外面には横方向の2本の沈線で区画し、その区画内に横方向の刻みを施す。調整は、ヘラ磨き、内面はナデである。色調は茶褐~暗褐色で、焼成はきわめて堅緻である。施文風からみておそらく滋賀里bに併行するものであろうと思われる。2は、B区の6層から出土した粗製系の胴部片。外面にはヘナタリの巻貝による条痕で調整し、内面はナデである。器肉はぶ厚く、1~1.3cmを測る。胎土には金雲母がみられ、粒子は微細で、その色調は茶褐色を呈するが、外面には煤が付着する。3は、A区の6層に出土した胴部片。外面の調整はヘラ磨で、内面には強力に煤が付着し、その調整は判らない。色調は朱色を呈し、焼成は良好である。調整や色調から弥生土器とも考えられるが、同系統のものが他にないことなどから、縄文土器の可能性も拭いきれない。4は、C区の上位の攪乱層に出土した粗製系の胴部片。外面はヘラ磨き調整で、茶褐~暗褐色を呈する。また内面はナデで、橙褐色を呈する。5は、A区に出土した底部片で、おそらくベタ底と思われる。調整は判らないが、ナデ仕上げである。色調は、橙褐~暗褐色を呈し、焼成は良い。

6は、B区の2層から出土した石核である。石材は疑灰岩質で全体に風化していて灰褐色を呈している。背面には自然面がのこり、荒削り工程のうちの残核と思われるもの。

7~14は、中世期のものと想定される出土遺物である。そのうち7は、F区から出土した土師

質（かわらけ）の底部片。底部外面には回転糸切りで、色調は赤みがかった橙褐色である。底部の大きさからみて、小皿系のものと思われる。8は、E区から出土した灰青色したスエ器片。9～11は、いずれもE区に出土した瓦器質の擂鉢。そのうち9は、胴部から底部にかけてのもので、外面は粘土紐痕が捉えられるような、凹凸をしていて荒い仕上げ。内面の見込には、8本の沈線状の櫛目が施されている。また10は、内外面の特に外面にはハケ目らしいナデの調整痕がみられ、見込みは部分的な深い櫛目を施している。11は、擂鉢の口縁部で、見込みに横方向の櫛目がみられるものである。12は、F区に出土した瓦器質の火鉢。垂直に立上がった口縁部外面には格子文、頸部には花柄文を押型する。また肩部には径約9.5cmを測る孔を有し、口縁部の径は34.5cmである。色調は内外面とも黒色を呈し、器面は艶やかである。おそらく黑色上器の系統をひくものであろう。

13・14は陶磁器。そのうち13は、F区に出土した備前窯のものである。内外面とも茶褐色で、胎土は灰色を呈する。薄い器肉、円周径から想定して、小壺であろうと思われる。14は、F区から出土した青磁。色調は灰青色を呈し、釉は厚く、外面には剥れがみられないが、内面には剥れの1部がみられる。素地の器面には、無数の横位の施文具痕がのこり粗い。また胎土は白灰色を呈し、微小の黒点がみられる。おそらく中国系の輸入磁器であろう。

(渡辺友千代)

第4章 中ノ原地點

第1節 地形的立地

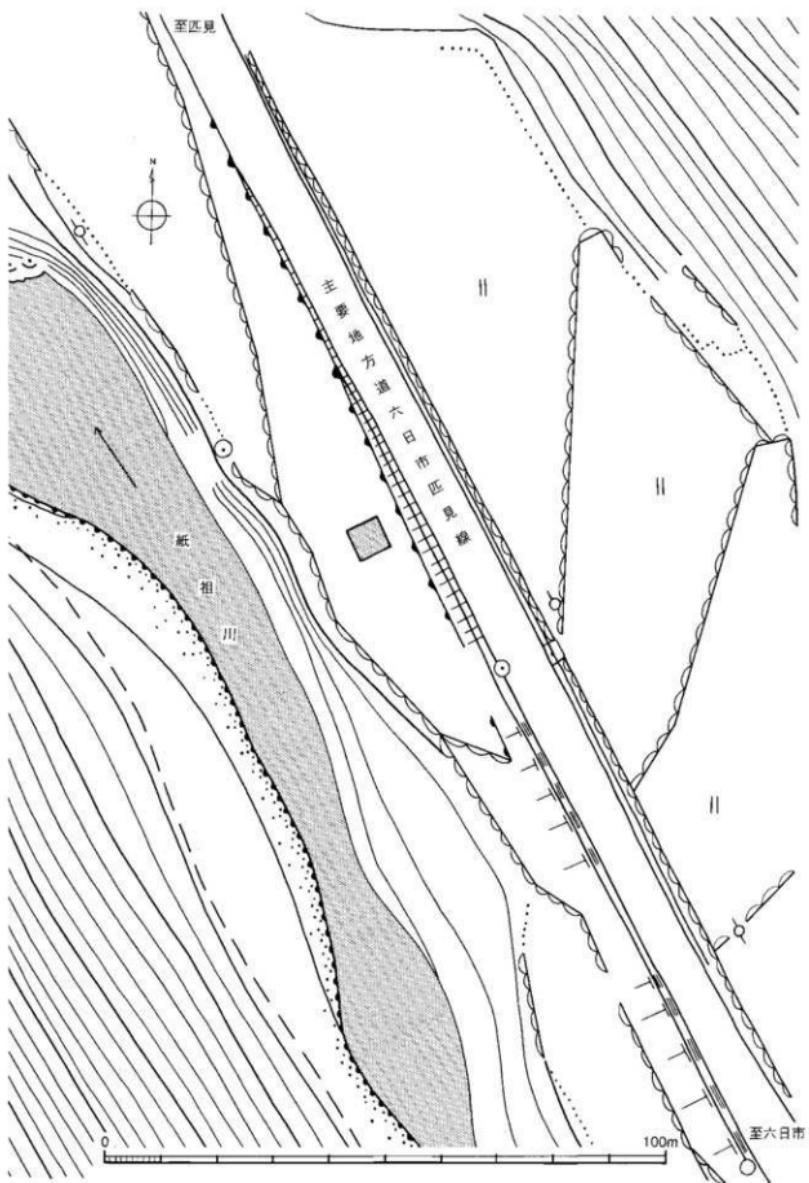
本地点は、匹見町大字紙祖口804-2に所在（第2図・図版10-1）し、そこ北西流する紙祖川の右岸にあたっている。

その紙祖川に沿う該当地は、比高差約6mを測って、南西—北東方向の幅約70m、北西—南東方向の長さ約200mを測る小規模な河岸段丘に立地し、そこは水田と化されている。そして、その流下に沿って北西—南東方向に主要地方道の六日市匹見線が貫道している。

第2節 調査の概要

1. 調査区の設定

調査は、主要地方道六日市匹見線の拡幅工事に伴うものであったため、調査対象範囲はおのずと限定されていた。したがって調査地点は、いきおい現地表面標高約487.34mを測る水田に任意に設定したのである。その調査区は、地方道と紙祖川との間の河岸端の、つまり道路から3m測った地点に併行して3mの方形区を設けた（第15図）。しかし道路と併行して設定したため、調査区の方向性は不規格である。よって15°の差異があるものの、凡そ調査区辺が北西—南東、北東—南西方向にあたるので、以下その方向性に従って呼ぶことにしたい。



第15図 中ノ原地点配置図

2. 基本的層序と層位（第16図・図版10-2～11-1）

本地点の基本的層序は、上位から1層の水田耕作土（暗灰色粘質土）、2層の灰褐色土（客土）、3層の茶褐色土（酸化鉄の含浸）、4層の黒色粘質土、5層の橙褐色粘質土（やや砂質土）、6層の黒褐色土（小礫を含む）、7層の黄褐色粘質土、8層の砂礫層の順に堆積する。

以下、具体的にみていくと、まず1層の水田耕作土は、その層厚は10～18cmを測り、下流方向の北西側が厚く、逆に上流方向の南東側は薄層であった。つぎの2層の客土は、2～5cmの層厚を測り、凡そ南東側に向って厚い。また3層の酸化鉄が含浸した茶褐色土は、2～3cmを測って、比較的その含浸度は一定している。いずれの層位とも、遺物・遺構は確認できなかった。

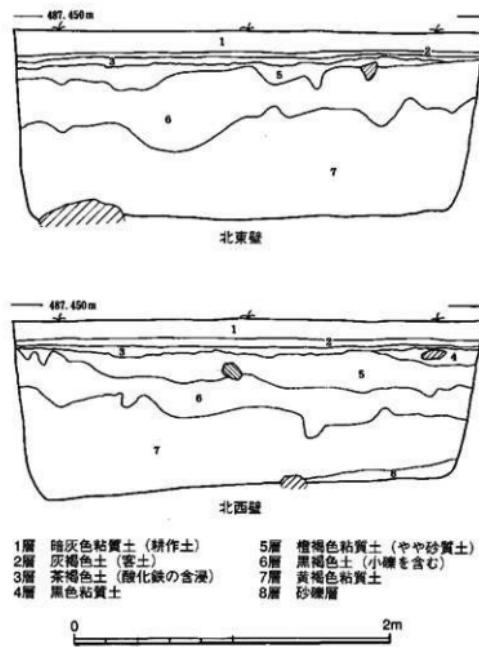
4層は、黒色粘質土である。層厚は、尖滅部から厚層部で20cmを測ってバラつく。とくに尖滅あるいは消去する部分は、つまり上流側および山裾方向にあたる東寄りであった。このことは水田造成などで、水平を得るために強い掘削が行われた結果であろうと思われる。

5層は、粘質おびた橙褐色砂質土である。粘っこくよく締まっている。層厚は、東側の尖滅部から、厚いところで30cmを測り、凡そ西側が厚かった。

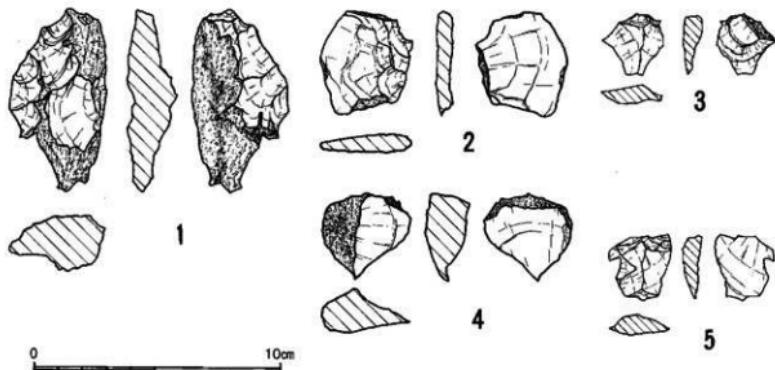
6層は、小礫を含んだ黒褐色土である。層厚は、20～50cmを測り、凡そ山裾の北東側が厚く、

紙祖川方向の南西側は薄層となっていて、傾斜していた。なお本層からは、炭化物および数点の石器剥片が、とくに北東半に偏在して出土している（第17図・図版11-2）。しかし、遺構と捉えられるものは検出されなかった。

7層は、橙褐色をした粘質土である。層厚は30～70cmを測り、とくに東側が厚層であった。礫は少なかったが、下位につれて多少みられ、以下は河床と思われる砂礫層に至ったので、掘削は止めた。なお、本層においては遺物・遺構は検出されていない。



第16図 中ノ原地点土層図



第17図 出土遺物実測図(4)

第3節 出土遺物（第17図・図版11-2）

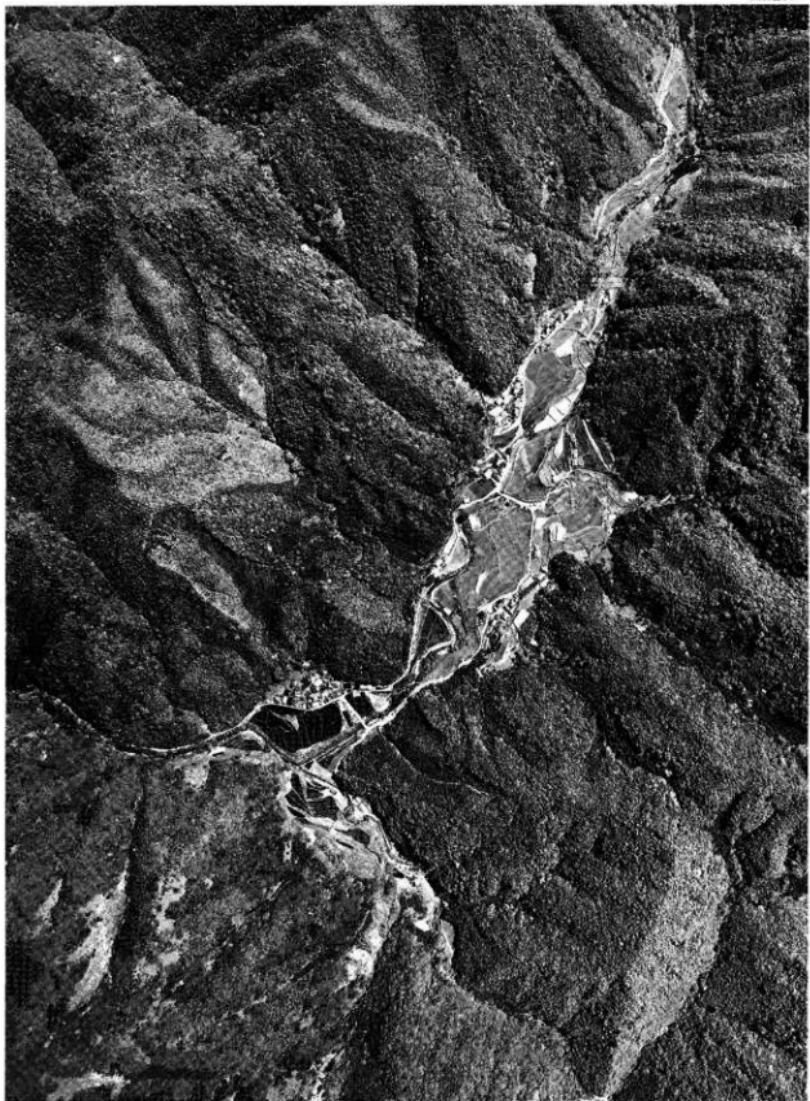
1. はじめに

本地点からは石器剥片を中心としたものが5点、そして数量の炭化物が出土している。これらの包含層は、すべて黒褐色土の6層で、おもに上位面に検出した。そして平面的分布においては、山裾方向である北側に偏して検出されている。

2. 実測石器

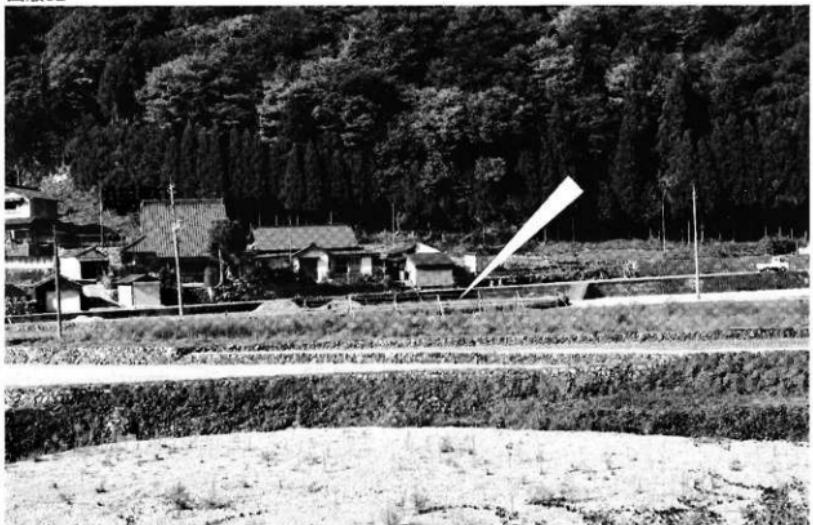
1は、角閃石安山岩である。長さ7.1cm、幅4cm、厚さ1.9cmを測り、重さは34.5gである。こぶりな母岩を素材とし、背腹面に數打による薄い剥ぎとり面がみられる。用材として好材でなかったものなのか、残核品と捉えられる。2は、石核で長さ4.1cm、幅4cm、厚さ0.6cmを測り、重さ11gの角閃石安山岩である。背面には主力剥離面があって、その右縁には2次的な剥離面がみられる。また腹面側には背面と同方向からの打撃ではあるが、別打撃による単裂したもの。2方からによる打面をもち、中央部にその稜を有す。また腹面には、石目によるイレギュラー打裂する。2次調整はない。4は、長さ3.5cm、幅3.4cm、厚さ1.5cmを測り重さ12.7gの角閃石安山岩の残核。5は、長さ2.6cm、幅2.4cm、厚さ0.7cmを測る角閃石安山岩。背面の中央には1本の稜線をもち、上辺部には数打の打撃面を有し、腹面は単裂する。2次加工はみられないが、右辺は鋭利な角度をもつ。使用・加工痕は認められないが、おそらく切出しナイフ形の石器であろう。

(渡辺友千代)

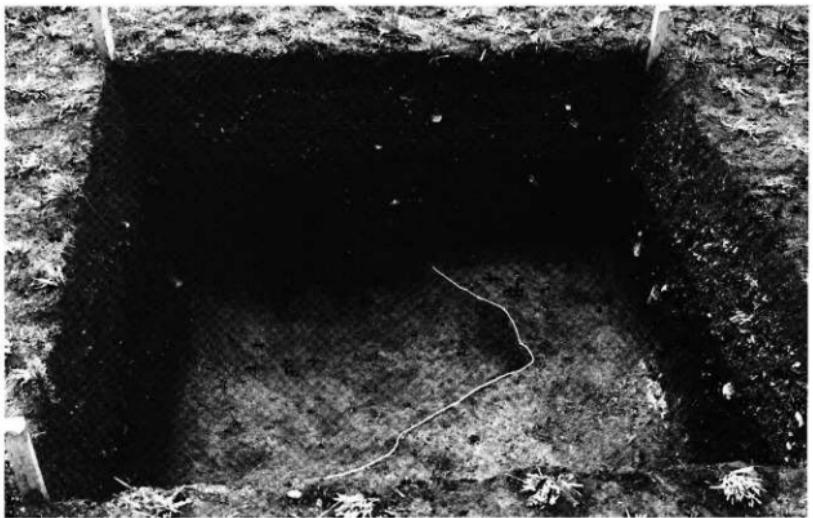


南西から俯瞰した三葛地区

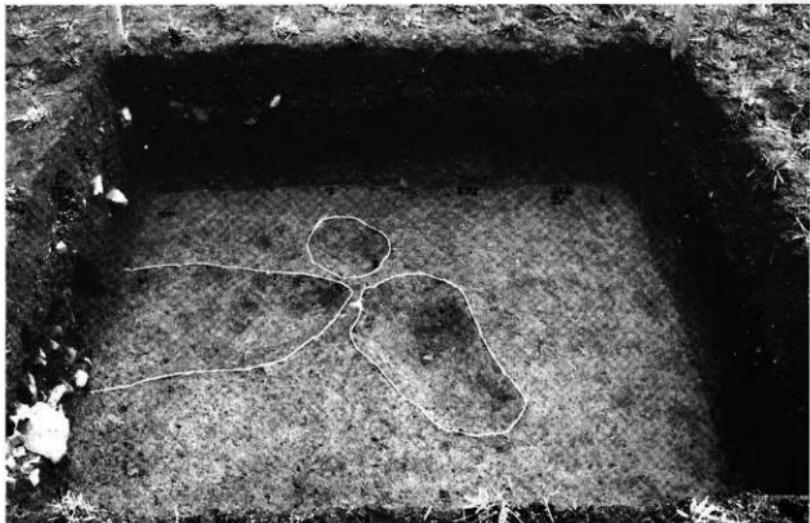
図版02



1. 南東からみた門田地点の近景



2. A区の完掘状況（東から）



1. C区の完掘状況（北から）



7-1



7-2



7-3



7-4



7-5



7-6



7-7



7-8

2. 門田地点の出土遺物

図版04



1. 南西からみた清左衛門田地点の近景



2. A区の完掘状況（南から）



1. B区の完掘状況（南から）



10-1



10-2



10-3



10-4



10-5



10-6

2. 清左衛門田地点の出土遺物

図版06



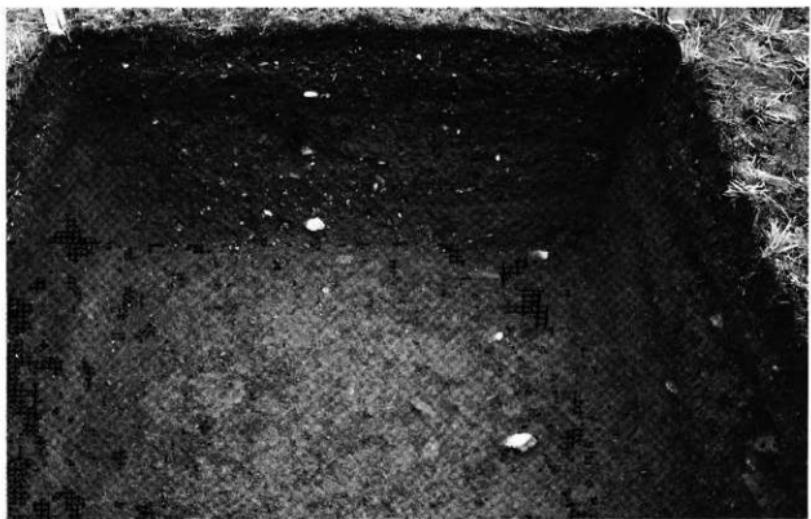
1. 北東からみた殿屋敷地点の遠景



2. A区の完掘状況（南から）



1. B区の完掘状況（西から）



2. D区の完掘状況（西から）

図版08



1. E 区の4層上位面の遺構表出状況



2. G 区の4層上位面の遺構表出状況



14-1



14-2



14-3



14-4



14-5



14-6

1. 殿屋敷地点の縄文出土遺物



14-7



14-8



14-9



14-10



14-11



14-12



14-13



14-14

2. 殿屋敷地点の中世出土遺物

図版10



1. 南東からみた中ノ原地点の遠景



2. 完掘状況と北東壁



1. 完掘状況（北西から）



17-1



17-2



17-3



17-4



17-5



炭化物

2. 中ノ原地点の出土遺物

平成9年3月25日 印刷
平成9年3月28日 発行

匹見町埋蔵文化財報告書第20集
匹見町内遺跡詳細分布調査報告書IX

発 行 匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町大字匹見11260
印 刷 有限会社 谷 口 印 刷
島根縣松江市西川津町3570
